



### 「人間力について～ いろいろ考えたGW」

今年のゴールデンウィークはこれまでと違った。例年、学生とさまざまな場所に出掛けていたが、もっぱら自宅の草むしりと、いつか読もうと書棚に積んでいた本との格闘に費やした。

優雅に映るがそうとも言えない。大学で遠隔授業が始まり、IT機器に疎い私も、新しい時代の流れとコロナ禍を痛感しつつ、YouTuberしながら授業の動画作成に苦労した。慣れるとなかなか便利なオンラインだが、違和感も残る。これは何なのだろうか。

批評家の小林秀雄がこんなことを言っている。「考える」とは「考(かんが)ふ」であり、「かむかふ」であったという。かむかふの「か」は接頭語であり、「む」は「身」であり、「かう」は「交(か)う」であると(学

生との対話＝新潮文庫)。つまり、考えるということは「自分が身をもって相手と交わる」ということだと。

痛いところを突かれた気がする。授業中に話がそれ、あらぬところで議論が活性化し、濃い内容に発展することは珍しくない。これを私は「対面の化学反応」と呼ぶ。まさにそれが起こりづらいのがオンラインではないか。単に私のスキル不足なのかもしれないが。

ソーシャルディスタンスや新しい生活様式などの言葉が多用される現在、さまざまな科学技術が私たちを助ける。しかし、根源に立ち返って仕事を考えなければ、技術を使いこなしているとはいえない。コロナ禍では人類が温故知新の思考を持ち、自身をアップデートさせ最新機器を使いこなすことが求められているのであろう。そんなことを思いながら次の授業の話を考えている。パソコンの前で「身が交(か)ふ」ような話を、と努力しているのだが…。簡単にはいかない。

---

たかみ・だいすけ 日本文理大人間力育成センター長。専門は初年次教育、ユースワーク、ボランティア論。別府市在住。39歳。